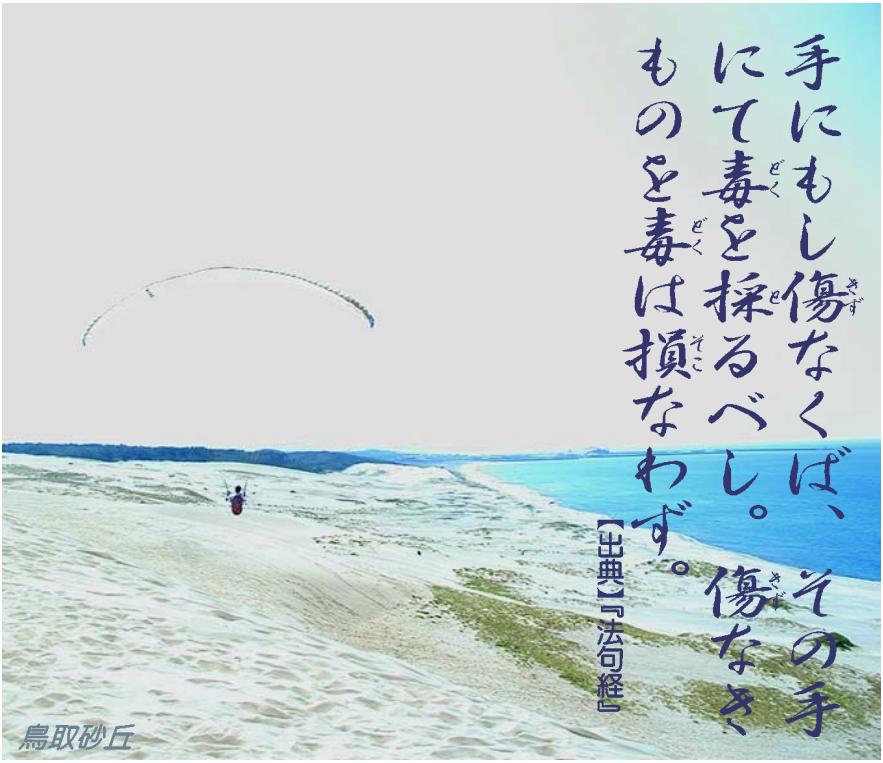
潮音寺だより

第 237 号
平成 15 年 7 月

電 話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
E-Mail:choonji@aichi.email.ne.jp
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬 1 -10-11
〈ホームページ〉http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/



毒あらば
いかがせん

毒されるを
危慎するな

害されるを
怖がるな

汚されるも
嫌がるな

つかみ取る
我が手に
傷なくば

毒されるはなく
害されるもなく
汚されるもなし

毒は
自らの手で
つかみ
捨てるがよい

猫の手

近年、空前のペットブームということです。一番の人気は、犬で、しかも、「どうする～アイフル～」のテレビCMで、愛くるしい演技ですっかり有名になった、チワワなのだそうです。

時々新聞に入ってくる、ペットショップの折り込みチラシの値段によって、どんなペットに人気があるか、だいたいは分かります。先日見た、チワワの場合、二十ウン万円には驚きました。しかし、これに驚いてはいけません。犬の一生にかかる費用は、およそで三百万円なんだそうです。

一昔前であれば、ご飯にみそ汁でよかったエサも、専用のヘルシー嗜好のものからグルメ嗜好のものまで、それはそれはたくさんの種類がありますし、毎年の予防接種、夏ともなれば、フィラリアや蚤の駆除薬と、これがなかなか費用がかかるのです。

私どもにも、小型犬が一頭います。皮膚が弱いという持病があり、人間様より高いシャンプー液や内服薬がはなせません。また、つい最近、良性ではありましたが腫瘍摘出手術をうけ、高額治療費もさることながら、傷が癒えるまで、犬本人はもちろんのこと、私どもも大騒動でありました。

毎日朝夕の散歩に、毎週のシャンプーにかかる時間が、小一時間、そして、月一回の美容院への送り迎えと、どうしてそこまでして犬を飼うのか、ということにもなりますが、それなりの理由はあります。一言でいえば、可愛いからということになりますが…。

犬とは違いますが、ある猫好きな方が、「猫の脳は、人間の脳に前頭葉がないだけで、人間と思考回路が似ており、自分は、猫と対話できる」と、自信満々にお話しされていたのを聞いたことがあります。そういわれてみると、あながち嘘ではないような気もしてきます。

そう遠い昔ではない、以前、人間と動物との関わりは、もっと実利的であったように思います。馬や牛は荷を引いたり、農作業の大事な労働力としてでありましたし、犬の場合であれば、番犬として、猫であれば、ネズミを退治するために飼っていたと思うのです。

慣用句としてよく使う、「猫の

手も借りたいほど忙しい」というのは、ネズミを捕るという仕事はちゃんとやってくれているけれども、もう少しほかのことにも役だって欲しい、という思いから出来たことばであろうと考えられます。猫にしてみれば、「十分に手を貸してやっているではないか」、というかもしれません。

私が子供の頃、ニワトリを飼っている家が結構ありました。もちろんペットとしてではなく、卵を産ませるために飼っていたわけです。今日のように、卵は安価なものではなく、滋養豊富な栄養源として、薬と同等の扱いを受けているような存在でありました。病気見舞いや、中元・歳暮などにいただいた折には、おが屑の中から探し出すのに、宝石を取り扱うようにしていました。そんな大事な卵を産んでくれるニワトリですから、十分に飼う価値があったわけです。しかも、卵が産めなくなれば、鶏肉として、貴重なタンパク源となったわけです。

現代人からしてみますと、「そんなかわいそうなことを…」というかもしれません。しかし、ただ可愛いから、あるいは、興味本位だけで飼い始めたペットが、「こんなはずではなかった」と、捨てられたり、ほったらかしにされ、虐待を受けているという事例がたくさんあるといいます。これこそ、かわいそうなことであります。

人間が、動物を飼うのは、人間が動物に対して、何かを求めているということにおいては、昔も今も変わらないのかもしれません。ただ、昔は、目的が実利的で、あくまで人間が動物よりも上位に立ち、支配しているという関係でしたが、現代では、ストレスが多い世の中ということで、動物に癒されたいという思いが強いように思えます。そうなりますと、人間と動物の関係は、友人のように同等か、むしろ、労って欲しいということになり、動物の方が、上位に立つことになります。

近年のペットブームは、これまでにない、人間と動物の関係を生み出しています。ゆえに、いろいろ模索していかなくてはならないでしょう。人間関係でも、ただ求めるだけではよい関係は生まれません。動物との関係においても同様で、飼い主には、それなりの覚悟が必要ということでしょう。

煩悩 ぼんのう

こころから湧き出る何ものかであり、人生を狂わせることすらもあるという意味で一般に使われる「煩悩」という語は、本来の仏教語としての意味と、かなりよく合致して日常語に生かされているようです。

「煩悩」の原語であるサンスクリット語のクレーシャは「心を汚すもの」「そこなうもの」「苦しめるもの」を意味しています。つまり、心身をわずらわし、苦しめ悩ます心のはたらきで、人が悟りをもとめる心をおこして、努力しようとするとき、最大の妨げになるものです。ひるがえせば、煩悩を断じることが仏教のめざすところ、悟りへの道であるといえます。

私たちは日常の生活の中で、さいなことで腹を立て、憎しみ、嫉み、おごり高ぶったりしています。これらの心の汚れの中でとくに貪（むさぼり）、瞋（いかり）、癡（おろかさ）の三つが根本の煩悩（三毒）と呼ばれています。その他、時代や経典によって、見惑修惑、惑業苦、六煩悩から百八煩悩など、さまざまな分類や数え方がなされています。

（ひろさちや『仏教百科』）

住職通信

自己の宣伝は
いらぬこと
まわりのものが
知っている

雑記

▼感謝 その10

新築庫裏へのご寄付を、荒谷政義様、荒谷文雄様、伊藤正彦様、濱村敏男様より頂戴いたしました。また、徒弟正道卒業祝いとして、疋田勝彦様、長沼弘様より頂戴いたしました。心より感謝申し上げます。ちなみに、現在、県立東浦高校の講師として勤務しております。

▼御遷座

私どもの町内の神社のお社が、四十年以上もの風霜を経て、朽ちかけているということで、新築することになりました。ご神体を遷座するに当たっては、午後八時から、篝火をたき、外からは見えないように白幕を張って行われました。

厳粛なもので、よい経験をさせてもらいました。

▼遷座式 篝火清し祈宜の声 沐魚